

「ジャックと生きる木　　ゝはじまりゝ」

P3ゝ

ジャックと生きる木はいつ出会ったのか？

そもそもジャックと生きる木は何をすることが目的なのか？

ジャックと生きる木の世界を知るためには、まずこの物語を読まなきゃ始まらない！　と
言ってもいいほどの物語！

マジで、これを読まないで世界線がぐちゃぐちゃになるから、読んでほしいです。

ジャックと生きる木 はじまりの話

作者…なつ

0 しモノローグし

この世界はかつて、人間たちが普通に生活していました。当然です。

しかしある時、俗にいう「魔王」が、この世界を奪おうと、魔王の魔法(面白ギャグ)で、人間たちを、他のものに変えてしまいました。

そんな中でも、魔法の影響を受けずにひっそりと生活している人がいた。

その名は「ジャック」。

イタリア生まれで、生まれてすぐ日本に引っ越してきた。

一応イタリア人なのか日本人かというところ……わかんないですね。ハーフという事にしておきましょう。

他のものに変えられても、魂をもって、そのまま生活している者もいた。

その中でも有名なのは「植物科」と言われている、植物に変えられた者たちのグループ。

リーダーの「生きる木」を筆頭に、「生きる薔薇」や「生きる苔」など、計8名のグループ。ある時ジャックは、この魔王に支配されている世界を救おうと立ち上がる。

そんな、どうでもいい物語である。

1 〽出会い〽

僕はジャック。高校2年生。

この世界を救おうと、昨日決心した。そして今日、実際に行動に移す。

「お母さん！ 僕行ってくる！」

「ジャック……本当に行くの？」

「うん。このままひっそりと生活していたくないし、助けを待っている人たちがいるからさ。」

「そう……じゃあ、このお守りをもっていつて。これはお父さんの形見のお守り。これを持って、お父さんと一緒に戦ってきて……」

「うん。それじゃあ……行ってくる…………」

お父さんは、僕と同じ考えをもって、戦った。

だが、あと少しの所で、魔王の卑怯な技によって倒れた。

だが僕は、そんなことにはならない。今度こそ世界を救うのだ。

「仲間を募るのよ！」

僕はお母さんの姿を見ずに走って森を抜けていく。

「はあ……はあ……！」

募る仲間はやっぱ「植物科」にしようか。そもそも、それ以外生きている人を知らない。

植物科の拠点は森の裏だろうか。

「はあ……はあ……！」

かなり走ったところで、拠点のような家の集まりを見つけた。

「ここは……？ あ、看板がある……！」

看板には「植物科の拠点」とはつきり書いてある。

「ついに、着いた……！」

すると、目の前から大きな木がやってくる。

「君は……人間？！」

「ええ。私は、この世界を支配している魔王を倒そうとしている『ジャック』と言います。

協力していただける仲間を募ろうと、この植物科の拠点到参りました」

「まだ人間が生きていたのか……！ とりあえず拠点に参り！」

木は、僕の手を引っ張り、拠点の家へ連れ込む。

「そうだったのか。まだ生きている人間がいたのか」

「けど、僕とお母さんしか残っていません」

「なんだと！ お母さんは今どこに！」

木は慌てる。

「え、えっと……家です」

「そうか。ならば今日にでも戦いへ出発しよう」

木はあっさりと言った。

「え！ 本当ですか？」

「ああ。実は、私たち植物科も、ちょうど今日、戦いに向けて出発しようとしていた所なんだ。」

最高だ。今日出発して本当に良かった。

「じゃあ、行こうか」

「はい！」

2 　　く麓解の輝きく

「あの……木さん……」

「ん？ あ、それより……僕のことは『生きる木』って呼んで！」

「え？ あ、はい。生きる木さん……」

「だから……一応、僕と君は同じ高校2年生なんだからさ、僕らは友達！ 敬語とか使わずに仲良くしていこうね！」

生きる木は急にテンションが上がったようだ。

「分かったよ……。い……。生きる木！」

「そうそう！　じゃ、これからよろしくね！　ジャック！」

「おう！　生きる木よ！」

そして、生きる木という話して、これからどうするか計画が決まった。

「じゃ、まずはジャックの家まで送って。そしたら、俺の魔法を使って、結界を張る」

「結界って？」

「お母さんを守るための結界さ。一応この世界の中では、五本の指に入るくらいの強力な結界を張るよ。」

「え？　木って、そんな強い技使えるの？」

「まあまあ！　そんなの、気にしないこと！　とりあえず行くよ！」

「お、おう……」

「で、家はどこにあるの？」

「この森を北の方向に253ぐらい行ったところだよ」

この森はかなり広い。僕の家は森の真ん中にある。植物科の拠点はかなり端っこにある。

「おう！　じゃあ、とりあえず急ごう！」

「え？　う、うん！」

俺と木は、急いで自宅へ向かう。

家にはお母さんしかいない。周りには誰もいない。

この世界に残っている人間は、僕とお母さんの2人しかいないのだ。

「ここがジャックの家？」

家は、集落のように家が何軒もある。だが、住んでいるのは真ん中の家だけ。

周りの家たちは、まるで要塞のようにトラップが何個も仕掛けられており、もしものことがあっても、時間が稼げるようになっていた。

その間に逃げることでできる設備もいくつか作ってある。

例えば、緊急地下通路は、旧東京市という、昔までこの国の首都だったところに繋がっている。

ファイナル・エアライドは、月に向かって飛べるロケットだ。これを使えば、結果的に31時間で第一宇宙速度になり、月の衛星となる。

「……おい！ ジャック！」

「あつ、ごめん……考え事をしていたよ……」

「じゃ、とりあえず結界を張るから、ちょっと待って。とりあえず、お母さんに結界を張ることを伝えておいて……」

「おう。頑張っ！」

「じゃ、結界はりまーす……」

すると、生きる木は呪文を唱え始めた。

「闇の紋章がにじみあがる……彼らは絶えず消滅する……」

とりあえず、生きる木に言われた通り、お母さんに伝えておくか。

「お母さん？ ちょっと伝えておきたいんだけど……」

「あら？ ジャック？ 伝えておきたいことって何？」

「実は、この家を囲って結界を張るんだ。まあでも、いつも通り家から出ないでね」
「あらそう。じゃあ、頑張ってきてね」

「とりあえず伝えたから木のところに戻るか。」

「木？ どう？」

「自壊と結合を繰り返し……何もかもを元の状態へと戻すだろう……」
「だんだんと地面が振動してきた。」

「すべてを守れ！ 第九の戦術（アビリティー）、『麓解（ろっかい）の輝き』！」
家の周りが青いドーム状の光に包まれた。

「はあ……はあ……終わったよジャック……」

「第九の戦術ってことは他にもあるの？」

「……う、うん。でも第九が最強の技だよ」

「へえ。とりあえず、ありがとう！」

「じゃあ、もう行こうか！」

「うん！」

「さて、もうめんどくさいから魔王の城に行くか！」

「え？ 早くね？」

「まだ家を出てから1時間も経ってない。」

「でも、もう行かないと……ね？」

「う、うん……」

3 　　人に眠るアビリティー

どうやら、生きる木の話から、魔王がいる城までは、徒歩だとだいたい20時間かかるらしい。

だが、さっき生きる木が結界を張るときに使った、あのよくわからない技の中に、高速移動できる技があるらしい。

しかし、さっき第九という最強の技を使ってしまったので、リチャージに時間がかかるらしい。

「……ねえ、さっきの説明じゃやっぱりわかんないや」

「ジャックは理解力が低いなあ……このゲームとかやったことあるよね？　そんな感じとらえちゃってよ」

「ふーん……（ゲームやったことないんだよね……）」

ずっと歩き続けて大体3時間ぐらいたった。

「木？　リチャージまであとどれくらい？」

「うーん、もういいかな？　じゃあ使っちゃう？」

「お、やったー！　高速移動の技は、俺も気になるな！」

「それじゃ、行きますか」

生きる木は、歩きながら呪文を読み始める。

「タイム&クリティカル！ 時を加速させろ！ 第二の戦術、『オーバーキーパー』！」

自分と生きる木の体の周りにオーラが出て、走るスピードが何倍にも速くなった。さらには疲れなくなった気がする。

「おお！ 速い！」

「どうよ、ジャック！ 僕のアビリティーは！」

「すごいよ！ こんな技が9種類もあるんだ！」

「このアビリティーっていうのは、植物科の時にみんなで研究したんだ。そしたら、人々に眠る技を発見したんだ。」

「へえ。植物科ってすごいね！（生きる木達は、あんな中二病風なことの研究をしているのか……？）」

「まあ、そんなことはどうでもいいんだよ……」

大体2時間ほど走っていると、何やら黒い城が見えてきた。

「あ、ジャック！ あれが多分、魔王がいる城だよ！」

あの城からは、まがましい霧囲気が出ている。

「なんか寒くなってきたね……」

「うん……城付近の温度は普通に低いからね……」

とりあえず、城の門の前についた。

「木？ ここがその城であっての？」

「うん。あつてるはずだよ」

「じゃあ……入ろうか……」

「……うん」

僕は生きる木と共に進んでいく。

4 ぐまさに迷路

そのまま城の廊下を進むと、大きな広間に出た。

「お、この部屋は……」

「ロビーみたいなのところかな？」

「ねえジャック、このロビーって、ジャックの家の集落よりも広いよね……」

先に言われてしまった……確かにこのロビーは広い。

「まるで迷路だな」

「ジャックの言う通りだねー」

ロビー(つばい部屋)は薄暗く、沢山の部屋と繋がっていると思われる廊下がある。
俺たちが足を止めていると、

「こっち来いよ」

「!？」

はつきりと聞こえた。

俺の声でもなく、生きる木の声でもない。

知らない誰かの声だ。

「ね……ねえ、ジャック……今の声って……」

「うん。多分敵だね」

はつきりと、頭に直接語り掛けるように聞こえた。

もしかしたら、これは敵の能力なのかもしれない。いや、きっとそうなのだろう。

「とりあえず進もう」

「え、そんなこと言うけど、廊下は沢山あるよ？」

生きる木は怯えている。

「とりあえず、目の前の廊下を進もう」

「わ、分かったよ……」

俺と生きる木は、また進んでいく。

廊下は長く、曲がりくねっていて、薄暗い。

「ねえジャック、どこまで進めば部屋に着くのかな？」

自分にも全く分からない。

「本当にどこまで行けばいいんだろうね……」

さっき聞こえた敵らしき声の正体も気になる。

色々考え事をしながら歩いていると、突き当りに扉があるのが見えた。

「ジャック！ 扉だよ！」

「木々！ やったな！」

俺が扉を恐る恐る開ける。

ドアがきしむ音がする。

「キィ……」

扉が開く。

中の部屋は、廊下と同じように薄暗い。

「やっと来たか……ずっと待ってたぞ……」

あの顔。どこかで見覚えがある。

「ジャック？ どうしたの？」

「さあジャック。来るがいい……」

父さんだ。

既に殺されていたと思っていた。ここにいたなんて。

そして多分あの風格は、父さんが魔王なんだろう。

俺は父さんと戦わなきゃいけないのか？

「……ねえジャック……」

生きる木が話しかけてくる。

「ん？ どうしたの？」

「まさかだけど……『魔王は消えた父さんだった』なんていうオチとかじゃないよね？」
「?!」

多分図星だ。生きる木が的確に当ててくる。

「そんなあるあるな、面白くないオチなわけないよね？ ね？」

俺は戸惑う。12ページも使ったのに、色々と言われたんだから。
とりあえずその場逃れの嘘をつく。

「い……いや、まさかね！ まさか……ね？ 俺のお父さんが魔王だなんてね？ ね、お父さん？」

「え？ いや……俺は魔王だけだ」

「えいっ！（ジャックはお父さんを殴った!）」

「痛っ!」

父さんはかなり吹っ飛んだ。

俺は父さんに耳打ちで伝える。

「ごによごによ……（父さん！ とりあえず、今だけ話合わせて！ お願い!）」
「あ……ああ！ そうだ！ 俺はジャックの父さんだが、魔王ではない!」

よかった。何とかその場しのぎはできそうだな。

「なんだ！ あるあるオチじゃなかったんだ！」

「そ……そうだよ！ はっはっはっ……」

俺は一息つくこうとする。

「いや、あるあるの親子で戦うような感じだったら、2人まとめて星にするところだったよ……」

危なかった。あのままだったら、木に一発でやられるところだった。

っていうか、生きる木1人（1本？）の力で魔王とか、全員倒せると思うのにな。なんでやんないんだろう……。

「さ、ジャック！ 魔王はいなかったんだし、家に帰ろうか！」

「そ、そうだな！」

「ジャックのお父さんも、家に帰りましょう！」

「お……おう！ そうだな！」

その場はしのげたようだ。

「お父さんは先帰っていいですよ！ 僕とジャック君は、少し回っていくので！」

「お、そうか。じゃあ先に帰らせてもらうぜ。」

最近は勉強をして忙しく、散歩とかなんて出来なかった。でも今ならお城を散歩できそうだ。生きる木も言ってた通り、少し回っていくことにしよう。

俺が生きる木に話しかける前に話しかけてきた。

「……………これでいいの？ ジャック……………」

「え？」

「……………これで誰も戦わずに、世界が平和になるの？」

今わかった。

生きる木は名誉革命を起こしたんだ。

本当は全部分かったうえで、俺ら親子を助けてくれたんだ。

「……………知ってたんだね」

「当たり前じゃん！ 僕たちを舐めないでよね？」

全員倒せると思うのに、倒さずに僕を連れてきてくれたのはそういうことか。

こういうことをしてくれる人が、本当の親友なんだろうか。

「人じゃなくて木だよ」

俺は慌てて訂正する。

「あ、そうか」

俺は呟く。

「……………ありがと……………」

「え？ 今なんか言った？」

「いや！ 何でもないよ！」
「あっそう……」

あれ？

今思えばおかしくないか？

心の中で人って言ったんだけどな。

口には出してないのに、なんで木はあんなこと言ったんだ？
心が読めたりでもするのか？

まあ、そんな訳ないか！

7
　　＼平和宣言＼

あれから魔王だった父さんは、生存人間の代表として植物科と講和条約を結んだ。
条約の本身は

父さんは魔王の座を降りる。

世界は、常に平和でなければならない。

これからは、皆が協力して生きていこう。

的なことが書かれているらしい。

実際には、生きている人は植物科には所属していないが いいのだろうか。

だが、そんなことを気にしている暇はない。

世界の支配が元通りになっても、世界は元通りになるわけではない。

時でも戻せればいいのだが。と思い、俺は生きる木に相談してみた。

「ねえ、木？」

「ん？ どうしたのジャック？」

「あの中二び……じゃない、かっこいい技の中に世界を元に戻すとかないの？」

「今、『中二病』って言おうとしたよね！ ね！ あゝ、元に戻せるのに、やる気失せたわあゝ

……」

木がすねた。

「ごめんって！ それより、元に戻せるなら戻してよ！」

「わかったよ。今、植物科の皆と調整してるから、終わったら元に戻すよ。どうせ暇なら家に戻っておけば？」

確かにそうだ。今は父さんと話がしたい。

「じゃあ、行ってくるね」

「うん！ お父さんによろしく言っといて」

「うん！」

そして生きる木達は、会議を再開する。

「……で、この浸食された土地のコアにエネルギーを送り続ける係は、薔薇っちなね」
植物科の一員である薔薇が喋る。

「大変そうだけど頑張るよ。あと、薔薇っちっていうのやめろって……」

俺は家に着いた。

「ただいま」

母さんと父さんが笑顔で話している。よかった。喧嘩とかはしてないみたいだ。

「お、ジャック！ お帰り」

「ジャック！ お帰りなさい！」

また、いつもの家族との生活が戻ってくるんだ。

生きる木には感謝しなきゃな。

少し家族で話していると電話がかかってくる。生きる木だ。

連絡先交換してないのに、なんで分かるんだよ……

「もしもし？ ジャック？」

「はい？ どうしたの？」

「いや、世界を元に戻す準備、整ったよ」

「じゃあ、すぐ行くよ！」

「はい、待てるよ」

「じゃあ、母さん父さん！ ちょっと行ってくるね」
父さんと母さんが返事をしてくれる。

「いってらっしゃい」

「気を付けるのよ？」

今考えると、俺の家と植物料の拠点は意外と近い。

最初は遠回りしてしまっていたが、走れば意外にも3分ぐらいで着く。

「あ！ ジャック！ 来たね！」

「ふう……これから始めるの？」

木の枝を振って答える。

「せやで」

8 くりストアパッチ

「じゃあ、定刻通り実施しますか」

やっぱり木は気が抜けてる。

いや、別にダジャレでウケ狙いとかじゃないからね？

「薔薇っちは、コアにダイレクトアタック開始！ 苔たんは、周囲の電磁波の確認と異常確認

を始めて！」

薔薇と苔が答える。

「ういっ！」

「はい」

同時に、地面が揺れてきた。

これが植物科の力なのか。

「よし！ ひまわり君のグループは『リストアパッチ』の実行！」

生きる木達は忙しそうだ。

そして、少しずつ地面の揺れが激しくなってくる。

また、地面が少しずつ盛り上がっている気がする。

「チューリップ！ フィールドサイトの稼働状況は？」

「正常に空間を保護してるッピ！」

「してるッピ」って……

「ジャック！ 来るよ！」

「えっ」という間もなく、地面が一気に盛り上がり、限界まで盛り上がった瞬間に、地面が爆発して、土が舞う。

そのまま自分たちも飛ばされていく。

「わーお……このままじゃ宇宙に行っちゃうんじゃないの……？」

「大丈夫だよ、ジャック！ さあ、戻るよ！」

そして、空に舞っていた土が元に戻る。

同時に、壊されていた建物が構成されていく。
黒く染まっていた土は元の色に戻り、枯れた木には葉が生い茂ってくる。
地面がアスファルトで舗装されていく。
世界が元に戻っていくんだ。

9 ｝エピソード｝

「……世界が……元に戻っているんだ……」

「うん。すごいでしょ？」

「ありがとう」

「えっ……うん！ 感謝したまえー！」

生きる木が偉そうに言う。

「へ！ 元の世界に戻ったけど、生きる木は変わんないな！」

「なんじゃそれ！」

二人で笑いながら地面に降り立つ。

周りを見ると、あの時と何一つ変わっていない。

本当に元に戻ったんだ。

「俺はちょっと周りを見てから、家に戻るよ。本当にありがとう！」

「はーい！　なんかあったらまた来てねー！」

「うん！　じゃ、また今度！」

俺は生きる木に手を振って、元に戻った世界を見に行く。
生きる木が元に戻してくれた世界に。

まだ家を出てから8時間ぐらいしか経ってないけど。
新しくできた親友が元に戻してくれた世界に。

〳〳〳終〳〳〳